S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――古代から宗教改革

Ｄ．確認事項

受講者には、前期と後期に、一回ずつの研究発表が求められる（一部、レポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（月３・４）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

前期：キリスト教と近代的知――聖書学と宗教批判

オリエンテーション――キリスト教と近代的知	4/13
１．西欧近代とキリスト教	4/20
２．啓蒙主義と理神論	4/27
３．近代的知と自然主義	5/11
４．近代的知と歴史主義	5/18
５．近代聖書学の成立とその諸原理	5/25
６．近代聖書学の諸帰結	6/1
７．宗教批判１――フォイエルバッハ・フロイト	6/8
８．宗教批判２――マルクス・キルケゴール	6/15
９．宗教批判３――ニーチェ	6/22
１０．研究発表	6/29
１１．研究発表	7/6
１２．研究発表	7/13
１３．研究発表	7/20
１４．研究発表	7/27

＜キリスト教と近代的知について＞

１　西欧近代と近代的知のモデル

２　近代的知と再帰性

３　むすび

１．西欧近代とキリスト教

・芦名定道「近代／ポスト近代とキリスト教―グローバル化と多元化―」を参照。（http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/59276/1/07ashina.pdf）

（１）近代の時代区分―近代という時代―

１．トレルチ、ティリッヒ、パネンベルクのキリスト教的近代論。

トレルチ：おおよそ 17 世紀までと 18 世紀以降において区切られた古プロテスタンティズムと新プロテスタンティズムの区別（厳密な意味における近代が啓蒙主義から始まる）。近代が宗教改革とルネサンスという二つの基本的傾向によって規定されている。

２．「宗教改革とルネサンスとがこの人文主義的新プロテスタンティズムのなかでこのようにして融合した状況がそのまま長続きしなかったことはいうまでもない。新プロテスタンティズムのなかで結びつけられたこの二つの基本的傾向(die Grundrichtungen)はふたたび

次のような種々のかたちで分離するに至った。」（Troeltsch, 1913b, 294）
「啓蒙主義は、教会や神学によって決定されていた従来の支配的文化に対立することによって、ヨーロッパの文化と歴史における厳密な意味での近代の開始であり基礎をなすものである。」（Troeltsch, 1897, 338）

３．啓蒙主義：単なる政治思想や思想運動を超えた、「生の全領域にわたる文化の全面的変革」（eine Gesamtumwälzung der Kultur auf allen Lebensgebieten, ibid., 339）。

「国家契約説」（国家の神学的基礎の破壊）、「近代の寛容国家」「教会の自然法的解釈」、「政治的、経済的、そして精神的自由を欲求する市民階層」、「新しい経済理論および社会理論」「重農主義」、「自然道徳」「自然宗教」、「新しい数学的・機械論的自然科学」、「コモンセンスや自然主義」、「啓蒙文学」、「新しい教育制度」、「啓蒙主義の神学」といった広範な諸契機を統合。

４．「正統信仰もしくは国家教会としての古プロテスタンティズムと、近代思想によって縦横に浸透された自由教会的、平等的な新プロテスタンティズム」（Troeltsch, 1913a, 191）の二つのプロテスタンティズムである。

５．ティリッヒ：「数学的自然科学、技術、経済」の「三重の活動性」(dreifacche Tätigkeit)とその担い手としての「市民社会」として捉え(Tillich, 1926, 32-36)、また啓蒙主義に関しても、その内実について、理性概念（普遍的、批判的、直観的、技術的理性）、自然概念（超自然に対する）、調和概念（世界観的、教育的、経済的）という観点から分析を行っている(Tillich, 1972)。

６．ブルジョワ社会＝近代：革命(17-18 世紀)、勝利(19 世紀)、崩壊・変容(20 世紀)という三つの段階を区別(Tillich, 1945)。

ティリッヒの関心は、革命とその勝利の中から形成された 18 世紀以降の近代がどのように崩壊・変容し――啓蒙主義の成立とその内的な葛藤、そして諸伝統の総合の試みとその挫折――、また現代の錯綜した動向の中に、どのような新しい精神状況の萌芽を見いだしうるか、という点に向けられている。

７．パネンベルク：『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』（Pannenebrg, 1997）。19 世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目。

宗教改革後の宗教戦争は、キリスト教的統一世界（Corpus Christianum）の分裂の固定化、つまり教派的多元性の状況を帰結したが、それは市民社会の統合がもはや宗教的統一性によっては確保できないことを意味した。むしろ、市民社会の安定化のためには、その不安定要因である教派的対立の激化を克服しなければならなかったのであり、ここに成立したのが、宗教的寛容論（信教の自由）と政教分離システムだったのである。その結果、宗教は私的領域に位置づけられ(Privatisierung der Religion)――公的領域に教派的対立をもちこまない――、市民社会の統合原理は、宗教と教会から、人間性と国家（絶対主義と国民国家）へと移行し（＝世俗化）、知的世界の中心も神学から哲学へと移ることになる。

19 世紀以降――ヘーゲル以降――の神学を含めた思想全般における「人間学への転回」（Die Wendung zur Anthropologie）が、まさにこの 18 世紀の思想状況へと遡るものであって、パネンベルク自身の神学構想が神学的人間学を方法論的基礎としているからに他ならない（Pannenberg, 1996, 294-367）。[4]

８．この講義の立場。

キリスト教思想史の観点から、狭義の「近代」は、18 世紀の啓蒙思想以降とし、それ以前は、近代の萌芽期（16 世紀、依然として中世の延長線上にある）、近代への移行期（17 世紀）と区分する。

９．出村彰『ツヴィングリ　改革派教会の遺産と負債』（宗教改革論集２）新教出版社、2010年。

「一五二五年をもってチューリヒの宗教改革はほぼ完成」

「チューリヒという都市共同体の内部に起こった事実上の宗教多元化を拒み、再び中世的な統合へ戻ったことに他ならない」、「以前のカトリックから福音主義へと置き換えられただけのこと」、「その内容は変わったとしても、構造的には連続している」（27）

「結果としての宗教と政治の分離、換言すれば宗教の私人化、政治の非宗教化への途である。長い目で見れば、ヨーロッパは、そして近代世界は、この方向へと進むことになろう。それが近代化そのものの指標にさえなるのである。しかし十六世紀の時点では、この選択肢はいかにも時期尚早と感じられた」（28）

「個人の宗教は依然として居住地に従属するのである」、「属地主義」（30）

「自己矛盾に陥った」（32）

（２）時代区分についての注意事項

10. 動的プロセスとしての「近代」という歴史時代を、一義的かつ客観的な仕方で前後の歴史時代から区別することは困難。

11. ティリッヒ：弁証法的歴史理論の先駆者として、フィオーレのヨアキムの歴史哲学（2010 年度）。

歴史は、父の時代と子の時代、そして聖霊の時代という三つの段階を経て展開する。歴史過程の三段階は、その創造者にして統治者である神が、三位一体という存在形態を有していることに対応したものであり、三つのペルソナが一つの本質を共有するのに応じて、歴史の三段階も相互に重なり合う形で進展すると考えられる。たとえば、父の時代の中で次の子の時代が開始され、子の時代の中で父の時代が継続されるという仕方である。これは、歴史の時代区分において、前の時代の中で次の時代が次第に準備され、それが一定の時期に顕在化する、しかし、新しい時代区分の顕在化ののちも前の時代の作用は継続していることを意味している。この見解によれば、歴史は、前の段階への否定と肯定を通して次の段階に弁証法的に進展するということになる。近代は中世の内で準備された連続的な発展という側面を有しており、近代以降も封建的な人間関係やシステムは部分的に存続している。

12. 「近代」を論じる上での留意点

・「近代」は多様であり、複合的である。

地域的な多様性が存在する。たとえば、西欧、中欧、東欧。進行形態も様々。

本講義では、「近代」を論じる際のモデルとなる「西欧」（特にイギリス）に注目して、18 世紀からを狭義の近代と考えるが、他の地域は、18 世紀においては未だ近代以前である。

・18世紀のイギリスは近代、しかし、日本は近代以前（近世）。同じ時代に、近代とそれ以前が混在する。「近代」は地域横断的な画一的時代というよりも、一定の特徴によって規定され地域的に多様な「歴史段階」というべきか。

（３）近代のメルクマール

13. 「近代」は研究者によって主観的・主体的に設定されるものであり、純粋客観的な時代区分ではない。したがって、区分を行うためのメルクマールが必要になる。

14. 近代（システム）を構成するサブシステム。

・政治あるいは国家：絶対王制から国民国家、議会制民主主義あるいは立憲君主制
近代憲法に基づく法体系（基本的人権、信教の自由、政教分離）

近代的な軍隊（傭兵から国民皆兵・徴兵制へ。フランス革命・ナポレオン戦争のインパクト）→総力戦へ

・経済：近代資本主義、市場経済→自己変革する資本主義

・科学：ニュートン物理学をモデルとした実証主義的科学　→　テクノロジー

大学制度を頂点とした教育システム→社会の学校化

イヴァン・イリッチ『脱学校の社会』東京創元社、『脱病院化社会　医療の限界』晶文社。

「医療機構そのものが健康に対する主要な脅威となりつつある」

「医原病」（Iatrogenesis）

出版・マスコミ、

大衆文化・芸術の大衆化

・再帰性の制度化

継続的な自己観察に基づく自己実現・アイデンティティ

セルフ・セラピー

アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ　後期近代における自己と社会』ハーベスト社。

・多元化（あるいは断片化）とグローバル化の相互促進

（４）西欧近代とキリスト教

14. 両義的な関係性

キリスト教は近代の母体であるが、近代以前（近代以降）である。

キリスト教は近代と親和的であるが、反近代的でもある。→　教派的多元性

多様な関係があり得る。

＜参考文献＞

１．Ernst Troeltsch, "Das Verhältnis des Protestantismus zur Kultur(1913a)", in:*Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie*, Scientia Verlag, 1981(hrsg.v. Hans Baron, 1925), S.191-202.（「プロテスタンティズムと文化との関係」『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、165-186頁。）

,"Renaissance und Reformation(1913b)", in: ibid., S.261-296.（「ルネサンスと宗教改革」『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、11-76頁。）

,"Aufklärung(1897)", in: ibid., S.338-374.（『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、1959年、87-152頁。）

２．Paul Tillich, *Die religiöse Lage der Gegenwart* (1926), in: *Paul Tillich. MainWorks 5*, de Gruyter, 1988.（「現代の宗教状況」（1945）、『ティリッヒ著作集　第八巻』近藤勝彦訳、白水社、1978年、9-132頁。）

, The World Situation (1945), in: Ronald H. Stone (ed.), *Paul Tillich. Theology of Peace*, Westminster/John Knox Press, 1990.（ティリッヒ『平和の神学　1938-1965』ロナルド・ストーン編、芦名定道監訳、新教出版社、2003 年、157-225 頁。）

, *A History of Christian Thought. From its Judaic and Hellenistic Origins to Existentialism*（ed. by Carl E. Braaten）, Simon and Schuster, 1972（1967/68）.（『ティリッヒ著作集　別巻三』佐藤敏夫訳、白水社、1980年。）

３．Wolfhart Pannenberg, *Theologie und Philosophie*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996.

, *Problemgeschichte der neueren evangelischen Theologie in Deutschland. Von Schleiermacher bis zu Barth und Tillich*, 1997.